

『〈ポスト 3.11〉メディア言説再考』を刊行

—東日本大震災から8年、日本文化の変遷とメディア言説の矛盾を考える—

概要

京都大学大学院文学研究科のミツヨ・ワダ・マルシアーノ教授が、編著『〈ポスト 3.11〉メディア言説再考』を刊行しました。本書は、2016～2017年度にかけて同教授が主宰した、国際日本文化研究センターでの共同研究「3・11以後のディスカール／『日本文化』」を基盤としています。

東日本大震災後について「公の声」をマスメディアは伝えてきましたが、その一方で見えない恐怖や言葉にできない感情は、写真や映画、論説、絵画、小説、ツイッターなどさまざまな形で表現されてきました。あの日、むき出しになった不条理や矛盾は、日本の文化にどのような変化を与えたのでしょうか。

本書では、哲学、文学、社会学、映画・映像学、メディア研究、クイア理論研究といった多彩な分野の執筆者が、東日本大震災後の日本文化の変遷について分析しています。東日本大震災を伝えるマスメディアの言説がもたらした功罪を、改めて考える機会を得ることのできる論文集に仕上がりました。

本書は、東日本大震災後の文化の変遷に関する研究書として稀有なものです。震災以後の「政治」あるいは「常識」から一歩距離を置き、メディアによって浮遊した言説に関して厳格な姿勢で取り組んだ各章は、いわば研究者自身の「未来に託す言葉」であると言えるでしょう。

本書は、2019年2月26日に法政大学出版局から刊行されました。



本書の表紙

1. 背景

東日本大震災からまもなく8年経ちますが、その間マスメディアを通して事故の現状を解説したり、国家の方針を声明したり、生命への危険が無いことを医学的見地から保証した「公の声」は、常に権威のある男性たちの口から発せられてきたのではないのでしょうか。その一方で、見えない恐怖や言葉にできない感情は、写真や映画、論説、絵画、小説、ツイッターなどさまざまな形で表現されてきました。

本書は、安全な未来を残すために私たちが本当に耳を傾けなければならない声は誰の声なのかを探すだけでなく、そうしたマスメディアを通して流布した「公」の言説を吟味し、東日本大震災後の日本文化の変遷を分析することに目標を置きました。

文化そのものが非常に多義的で多層的であるため、文化事象を分析することは困難です。その複雑な現代日本文化を、学際的なアプローチ、つまり色々な専門家が集まり、それぞれの分野からの視点で考える、こういった方法論によって読み解く、それがこの論文集の学術的背景です。

2. 研究手法・成果

学際的な研究を意識した結果、本書は哲学、文学、社会学、映画・映像学、メディア研究、クイアー理論研究といった多彩な分野から執筆者を得ることができました。(目次参照)

本書では、一つの学術領域に留まることの無い様々な視点から、理解しやすい言葉で、解りやすい事例を使いながら、東日本大震災後の日本文化の変遷についての分析が展開されています。本書によって、東日本大震災を伝えるメディアの言説がもたらした功罪を、改めて考える機会を得ることができます。

3. 波及効果、今後の予定

2011年以来、東日本大震災に関する書籍は驚くほどたくさん出版されました。しかし本書のように、震災後の文化の変遷に関して、学者によって時間をかけながら分析された研究書は希有です。本書は、そういった震災以後の「政治」あるいは「常識」から一歩距離を置き、メディアによって浮遊した言説に関して厳格な姿勢で取り組んでいます。いわば研究者自身の「未来に託す言葉」であると言えるでしょう。

今後、ワダ・マルシアーノ教授は、ドキュメンタリー映画作家やアーティストたちが作り出した映像作品について考える単著を発表する予定です。彼らがフクシマ以後、どのように津波震災・原発事故・放射能被曝という一連の不条理に立ち向かってきたのか、具体的な映像に注目しながら視覚メディア言説の中に響く意味を考える試みです。われわれ自身がこの世界でこれからどのように生きていくべきか、社会に対して何ができるのか、「明るい未来」をどう描けばよいのか、彼らの映像を注視しながら、これらの質問に対する答えを共に考えることがこの単著の目的です。

4. 研究プロジェクトについて

本書の出版にあたり、国際日本文化研究センター（日文研）より出版助成金の支援を受けています。

<研究者のコメント>

『〈ポスト 3.11〉メディア言説再考』は、現在高校や大学で勉強をしている学生たち、これから社会に入り仕事を始めようとする若い方たちに特に読んでいただきたいと思います。「大人」や「社会」は決して怖いモノではないけれど、彼らがわれわれに提示する「情報」や「言説」は、必ずしも正しいものではないことを、この本を読むことで改めて知ってもらいたいと思います。メディア言説を批判的な視点から読み解く力、いわゆるメディアリテラシーを身につけるための一つの方法として、この本を読むのも一つの読み方だと思います。



ワダ・マルシアーノ 教授

<書籍タイトルと目次>

書名：『〈ポスト 3.11〉メディア言説再考』

<目次>

第Ⅰ部 メディアとしてのアーカイブ

第1章 記憶メディアとしての災害遺構——3・11の記憶術【松浦雄介】

第2章 市民の記録映像に見る被災の差異——せんだいメディアテークの映像アーカイブより【北浦寛之】

第Ⅱ部 浮遊するメディア言説、隠された現実

第3章 「安全安心」の創造——お札効果とその構造【西村大志】

第4章 震災関連死の原因について【一ノ瀬正樹】

第5章 ポスト3・11と代受苦の思想【出口康夫】

第Ⅲ部 挑戦的メディア、「芸術」そして「文学」

第6章 3・11以後の芸術力【ミツヨ・ワダ・マルシアーノ】

第7章 写真家の使命——畠山直哉の「転回」から考える【近森高明】

第8章 上書きする震災後文学——柳美里の『JR上野駅公園口』を周辺からの歴史として読む【岩田=ワイケナント・クリスティーナ】

第Ⅳ部 映画、二〇世紀メディアの王道

第9章 『シン・ゴジラ』と『絆 再びの空へ』——二人のゴジラ監督は津波と原発事故をどう「記憶/忘却」したか【須藤遙子】

第10章 喪失と対峙する——震災以後の喪の映画における移動性【久保 豊】

第11章 “かつて3・11があった”——映画における災害と忘却のストラテジー【谷川建司】

第12章 記憶と身体を乗り越える——東北ドキュメンタリー三部作とポスト・福島ドキュメンタリー【馬然】

第Ⅴ部 イコン性メディア、マンガ&アニメーション

第13章 放射性物質の表象——見えないものを見ること、見えるようにすること【石田美紀】

第14章 破局と近視——宮崎駿『風立ちぬ』について【長門洋平】

あとがき

索引

出版社：法政大学出版局（本書紹介ページ：<http://www.h-up.com/bd/isbn978-4-588-67522-5.html>）

ISBN：978-4-588-67522-5

<執筆一覧>

編者：

ミツヨ・ワダ・マルシアーノ (Mitsuyo Wada-Marciano) 京都大学大学院文学研究科教授 (映像・メディア学)

執筆者：

松浦雄介 (まつうら ゆうすけ) 熊本大学大学院人文科学研究部教授 (社会学)

北浦寛之 (きたうら ひろゆき) セインズベリー日本藝術研究所フェロー (映画学・メディア論)

西村大志 (にしむら ひろし) 広島大学大学院教育学研究科准教授 (社会学)

一ノ瀬正樹 (いちのせ まさき) 東京大学名誉教授・武蔵野大学グローバル学部教授 (哲学)

出口康夫 (でぐち やすお) 京都大学大学院文学研究科教授 (哲学)

近森高明 (ちかもり たかあき) 慶應義塾大学文学部教授 (社会学)

岩田=ワイケナント・クリスティーナ (Kristina Iwata-Weickgenannt) 名古屋大学人文学研究科准教授 (日本
近現代文学)

須藤遙子 (すどう のりこ) 筑紫女学園大学教授 (文化政治学・メディア社会論)

久保 豊 (くぼ ゆたか) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館助教 (映画学)

谷川建司 (たにかわ たけし) 早稲田大学政治経済学術院客員教授 (映画史)

馬 然 (Ma Ran ; マ ラン) 名古屋大学人文学研究科准教授 (映像学)

名取雅航 (なとり まさかず) 第12章翻訳金沢大学, 富山大学非常勤講師 (映像学, 英語)

石田美紀 (いしだみのり) 新潟大学人文学部准教授 (映像文化論)

長門洋平 (ながと ようへい) 京都精華大学ほか非常勤講師 (聴覚文化論・映画学)